
なんて楽しいオーケストラ！

綾野 琴子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんて楽しいオーケストラ！

【Nコード】

N6320P

【作者名】

綾野 琴子

【あらすじ】

しがないコントラバス弾きが語る、オーケストラ&mp・クラシックエッセイ。担当楽器のコントラバスや、たまに吹奏楽についても語る……？そんなに真面目な物でもないので、気軽に、ちょっとした暇潰しにどうぞ。

プロローグある合奏の日の私

某日、某ホール。「ベートーヴェン 交響曲第九番四楽章」の合奏十分前。

……よいしょっと。ほぼ立つような格好で、バス椅子に座る。高さを調節した後、茶色の大きな相棒を構えて、ギコギコ。ブーン。よしよし、今日は調子がいいぞ。なんかいけるかも。そんな風に自己暗示しながら、私の相棒「コントラバス」をぶんぶん弾く。ある程度弾いたところで、ちょっとだけ周りを見渡してみる。目の前にはヴィオラとチェロ。それぞれ、色んなパッセージを練習しているようだ。……あ、私の前にいるチェロ、完璧に弾いているな。私も頑張らなきゃ。

コントラバスが座っている場所の向こう側に、第一ヴァイオリンがいる。メロディーを弾いているようだ。気持ちよさそう。そんな第一ヴァイオリンの横で、必死に刻んでいるのは第二ヴァイオリン。真剣な面持ちだ。

管楽器の方も見てみよう……と思ったところで、急に周りが静かになる。あわてて指揮台の方へ向き直ると、コンサートミストレスが立っていた。どうやらチューニングが始まるようだ。

コンミスのヴァイオリンとオーボエが、Aの音を出す。二つの音がぴったり合った後、弦楽器が一斉にAを弾き始めた。私も弦を軽く押さえ、高いAを出す。……うん、合ってるな。たぶん。

管楽器のチューニングも終わった後、常任指揮者のおじいさ……ダンディーなおじさまが台に上り、こう言った。

「今日は、マーチからやります」

コントラバスはしばらく休みの所だ。私は力を抜いて楽な姿勢になった。そして、私の右後ろにいる管楽器の方に、耳を傾ける。

指揮者が腕を降り下ろすと、ファゴットとコントラファゴット、

そしてバスドラが、その独特な低音を「ぶん」と出した。

「ぶん」がしばらく続いた後、ピッコロが可愛らしいメロディーを吹き始める。トライアングル、シンバルも伴奏に加わって、曲は楽しい雰囲気になった。

よく耳を済ましてみると、ホルン、オーボエ、クラリネットも対旋律らしき音を吹いているようだ。ピッコロのメロディーと合わさって、いい感じだ。さらに、トランペットも所々合いの手を入れている。これもナイス。

だが、これだけ管楽器が吹いているのに、何かがない。そう思っただけで管楽器のいる方を向くと、フルートだけがお休みしていた。他の木管楽器は吹いているのに何故……と思ったが、ベートーヴェンの事だから、何か考えがあってフルートを入れなかったのだろう。ついでに言うと、休んでいるフルート奏者は、どこか凜としていた。

場面は変わって、アンダンテ マエストーソ。どこかと言うと、合唱の皆さんが「ふろいでーしえーねるげってるふんけん」という有名なメロディーを歌い終わったすぐ後の所である。

ここを担当しているのは、チェロとコントラバス、そしてバスドラだけ。低音弦にバスドラが加わる事で、なんとも表現しがたい威厳と威圧感が醸し出されるのだ。つまり、すごくカッコいい。第九はなにも、「ふろいでーしえーねる」だけが全てでは無いのである。

しばらくすると、ヴァイオリンとチェロバス、コントラファゴットが細かい音の動きを、ヴィオラは単独な動きをし始める。そして、木管とトロンボーンが歌う。

またしばらくすると、今度はヴィオラとチェロ、オーボエ以外の木管、トロンボーンでアンサンブル。この部分は、とても宗教的な雰囲気。そして神秘的。響きがまるでオルガンのよう。私はここを聞くと、なんか泣きそうになる。今日も、不覚にも目頭が熱くなってしまった。みんなにはバレてないだろうからいいか。

合奏も佳境に入り、曲は終盤、マエストロソ。

「コントラバスはもつと弾け」と言われたので、弓をふんだんに使って、出来る限り頑張つて弾く。今更だが、今日のコンバスマンバーは私一人（！）なので尚更だ。

プレスト。管楽器が吼える。弦楽器が素早く刻む。打楽器が一斉放射。音量がスゴい事になる。

オケのメンバー全員で渾身一杯音を出す。最後は「ばん！」で決め。みんなが止まる。指揮者も止まる。ちよつとの間の静寂。

指揮者のおじさまは棒を降ろして言った。「今日は、これで終わろうか。細かい所は、また明日」と。素敵なにやり顔である。

終わった後、軽いため息。そして時計を見ると、「9:02」と表示されていた。ああ、今日も疲れた！

……とこんな風に、忙しい時（主に十月〜十二月）はとことん疲れるわが部活。正直、高校時代の吹奏楽部以上の忙しさ。だけど、それでも部活を続けているのは、こんな思いがあるからである。

やっぱり、オケって楽しいんだよね！

プロローグがある合奏の日の私（後書き）

初っぱなから、あまりエッセイっぽくないですね。次回は、このエッセイ（もどき）の説明します。

挨拶とエッセイの紹介

どうも、初めまして。初めてじゃない人は……おはこんにちばんは？ すみません、変な挨拶で。

私は綾野 琴子と言います。「なんか、和風の名前にしたかった」という気まぐれな理由でペンネームをつけてしまっような、ちょっとテキトーな人です。どうかよろしくお願いします。……以上、挨拶終わり。

私はなんとなく、敬語よりも常体（である調）で書く方が好きだから、これから先は、基本的にである調で文を書こうと思います。あ、でも、固すぎる文章になるのもあれなので、敬語とか話し言葉とか、色々混じりますよ。

エッセイを書くのは初めてだから、文体は試行錯誤。たぶん、違和感ある文章が多いと思いますが、そこんどこ了承してくださいと、非常に助かります。

長い前置きはさておき、まずはちょっとした自己紹介を。

私は、田舎（山の中にある）の大学に通っているピカピカ！……とはもう言えない一年生である。オーケストラに入っていて、そこで「コントラバス」という低音楽器を弾いている。

「コントラバス」と聞いて姿を思い浮かべられないあなたは、ヴァイオリンを人の身長程度（180センチ？）に大きくしたものを想像してほしい。だいたいコントラバスと同じ感じになる。厳密には違うけど。

と、そんな事を書いているうちに、気が付いた。これを読んでいるのは、オケなり吹奏楽なり、何らかの音楽活動をしている、またはオーケストラが好き、興味がある……といった人がほとんどだろう。なら別に、コントラバスのビジュアルを無理やり説明しなくても良かったのかも。（でも、今更消すのも面倒くさいので、このま

まにしておこう。)

……うーん、いきなり話が脱線してしまった。こんな調子で、このエッセイは大丈夫なのだろうか。

話題を変えよう。さて、今から説明する事は、このエッセイは結局何について書くのか……ということである。

「なんて楽しいオーケストラ！」という(うさんくさい)タイトルになっているが、たぶん、オーケストラの事より、私の担当楽器であるコントラバスや、クラシック曲を話題に出す事が多くなるだろう。

じゃあ、何で「オーケストラ」がタイトルに入っているかというと、ただ単にゴロが良かったからである。あとは、ちょっとしたノリである。特に意味はない。……テキストでごめんなさい。ちゃんと、オーケストラの事も書きます。ネタが続く限り。

書きたいものは色々あるが、優先的に書こうと思っているテーマは、年末になると話題にのぼる「第九」。そして、「自分がオケに入るまでの道のり(歴史)」。

前者はともかく、後者は誰得？ と言われそうだ。でも、自分の事を優先的に書くのには、ある程度理由がある。それは、こんな中途半端な時にエッセイを始めたのとの関係がある。

後十数日で2010年が終わり、2011年に入る。だが、新しい年に入ってしまいう前に、この区切りのいい年(なんとたつて、0が二つ付いている年なのだ)に、一度自分を振り返ってみたい!と思ったのである。

音楽生活を中心に、これまでの自分の人生を振り返って、文章にまとめて、自分を見つめ直す。それから、新たな年を、新たな気持ちで迎えたい。そう思ったから、まずは自分の歴史を書くのである。

……表向きは立派な(?)事を書いているように見えるが、本当のところは、ただの自己満足である。まあ、プロのエッセイストでもない、しがない大学生が書くのだから、ある程度は自己満であっ

ても、きつと許されるだろう。

ちなみに、2011年に入った後は、コントラバスの魅力や記事にしたいクラシック曲など、好き放題書こうと思う。もちろんオケの事も書くはずだ。

あと注意しておく事といえば、このエッセイは不定期更新だという事だ。今月は頑張つて更新するつもりだが、来月以降は、どうなるか分からない。

私は気まぐれやで、しかも遅筆である。創作意欲が湧いているときは結構早く書き上げるのだが、意欲があまり無い時は、亀のようにとにかく遅い。だって、もう一方で連載している小説を、二ヶ月も放置するような奴なのだ、私は。

もし、このエッセイをこれからも読もうと思っている神様なあなたは、あまり更新を期待せず、たまに覗いてくだされば、それで十分でございます。……もう一方の小説も実質不定期ではないかと思っっている方、まさにその通りです。何も言い返せない。頑張つてはいるんです、これでも。

ついでに、このエッセイは書くネタが無くなるまで続く。すぐに終わっちゃうかもしれないし、意外と長く続くかもしれない。このエッセイの行く末は、神のみぞ知るのである（大げさである）。

これで、「なんて楽しいオーケストラ！」の説明は、あらかた終わった。テキスト、ぐだぐだなエッセイ（もどき）である事は、前話と上記を読んで十分解つただろう。だが、「仕方ないなあ。これからも、暇潰しにでも読んでやるよ」と思ってくれている神様なあなた。ありがとうございます。改めて、よろしく願います。

最後に、ここまで読んでくれた方。本当にありがとうございます！
では、また次回。

中学以前〜無意識に聞いてたクラシック〜

初めからいきなり自分史を語るなんてどうよ?……とは思ったが、まあ理由は前話で書いた通りなので。これから四話程度、(自己満足で)今までの自分をクラシック関係の出来事に基づいて書かせてもらいます。

さて、私の中学以前の人生だが……私は中学時代までは、どちらかと言えば音楽に興味がなかった。小、中学時代は運動(主に陸上競技)好きな少女だったのである。

今では、私が運動していた面影は全く無いが、昔はそこそこ運動神経が良く、足も速い方だった。部活はもちろん体育会系である。

小、中学時代の私の意識は、終始運動方向へ向きっぱなしであった。一方の音楽はと言うと、決して嫌いじゃ無かったし、むしろ好きな科目であった。リコーダーも歌も好きで、授業は楽しかった。だが、クラシックというものはあまり知らなかったし、知る気も無かった。時々、弦楽部の発表を聞く機会があったが、聞いても「へえー、弦楽器弾けるんだ。すごいなあ」程度の認識であった。

上記のように、クラシックをそんなに積極的に聴かなかった私。しかし。そんな体育少女の私は、実は赤ん坊の頃から、無意識にクラシックを聞いていたのであった(事に最近気付かされた)。

いきなり話が変わるが、「タマ&フレンズ」を知っているだろうか。十数年前に放送されていた、タマという子猫とその仲間の猫、犬達が繰り広げるほのぼの日常アニメである。果たして、覚えている人はどのくらいいるのだろうか。

私は小さい頃、このアニメをよく見ていたらしい。ビデオに録画もしていて、小学生、中学生の時も、たまに取り出しては見ていた。とにかく、この可愛らしい猫達が好きだったのである。

時は過ぎて、大学に入った後のある日。クラシック曲を携帯に取り込めるサイトで、「なんかいい曲無いかな」と曲を粗探ししていた時、私はある曲名が目に入った。「ワルツィング・キャット」……作曲者は、「そりすべり」や「トランペット吹きの休日」で有名な、ルロイ・アンダーソンである。

この曲名に、私はあのアニメを何となく思い出しながら、ちよつと聴いてみた。聴いた瞬間、飛び上がった。そして心の中で叫んだ。

「これ、タマ（のアニメ）で流れていた曲じゃん！」
忘れかけていた「タマ&フレンズ」のあるシーンを思い出す。すると、そのシーンと一緒に、使われていたクラシック音楽も頭の中に流れてきた。今まで何となく聞き流していた音楽だったが、何度も見ていたおかげか、曲の旋律を無意識のうちに覚えていたのである。

そういえば、私はたまに、頭の中で「ワルツィング・キャット」（当時は曲名を知らなかった）の旋律を歌っていた。私は知らず知らずのうちに、クラシックに親しんでいたのである。

後一曲紹介するが、小学生の頃に無意識に聞いていたクラシックに、デュカスの「魔法使いの弟子」があった。

この曲は、かの有名なミッキー・ウスのビデオで聞いていた。確か、ツキーは赤いローブ（だっけ？）を着て、青い、星模様がついたとんがり帽子を被っていたような気がする。内容は、歩く箒がミツ……の言う事を聞かず、洪水を起こした事しか覚えていない。ああ、箒恐ろしや。

トラウマになりかけた内容（特に箒が）はもちろんだが、一緒に流れていたBGMも、私はどうやら覚えていたらしい。この曲も偶然聴いて、箒が歩くシーンと一緒に流れていた曲だと、一瞬で分かった。

これはついでの話。曲名が分かった後、改めてあのネズミさんの

ビデオを見ようとした。しかし、どんなに探しても、あのビデオは見つからなかった。母も、捨てた覚えはないと言うのに……世の中には、不思議なこともあるもんだ。

……とこんな風に、私は小さい頃から、偶然か親の意図的行動が分からないが、知らず知らずのうちにクラシックに親しんでいたのである。

確か、母は私が産まれる前、胎教にいいからとモーツァルトを聞いていたらしい。なら、タマやマウスさんを見せたのも意図的かもしれないが、別に悪い事ではないから、まあいい。

とにかく、私は中学以前、運動ばかりでクラシックとは関係ない生活を送っていたように見せかけて、実は結構、クラシックと縁がある生活をしていたのであった。以上、中学以前編終わり。

次回は、高校の吹奏楽部編に行きます。

高校編1〜クラシックの編曲は

クラシック編曲の事を話す前に、まず吹奏楽部に入った経緯を話そうと思う。

中学生までは運動一筋な感じの私であったが、高校では同じ運動部に入るか、それとも新しい事に挑戦するか迷っていた。運動部に入るのをためらったのは、中学三年の引退試合で、色々燃え尽きたからである。

そんな迷える子羊(?)に転機が訪れたのは、高校合格後にあつた新入生説明会の日だった。

実力テスト等疲れる事を終えた後、さっさと家に帰ろうとした時私は、先輩方に渡された沢山の部活勧誘のチラシを抱えながら、校門へ向かつて歩いていった。その途中で、金色の楽器が演奏している所に遭遇したのである。何の曲を吹いていたのかは忘れたが、楽しい音だったのは記憶している。聴いていて、私はワクワクした。今まで疲れていたのに、演奏を聴いているうちに、疲れなどいつの間にか忘れていた。

先輩方の生き生きした演奏を聴いて、吹奏楽に興味を持ったと同時に、改めて音楽の素晴らしさに気付いたのである。

その後、春休みに吹奏楽部に見学に行き、改めてこの部に入ろうと思ひ、入学後も他の部は見学しないで吹奏楽部に入ったのであった。何故コントラバス担当になったのかは、話すとちよつと長くなるため、割愛する。コントラバスについては、またいつか話したい。

そんな経緯で入った吹奏楽部。そこで初めて聞いたクラシックは、ボロディン作曲「イーゴリ公よりだったん人の踊り」。この曲は、吹奏楽コンクールの自由曲であった。

先輩達の演奏を聴いているうちに、私はこの曲にハマっていった。特に、娘の踊りの流麗さと哀愁漂うメロディーには、思わずため息

をついた。この曲を弾きたい！と思ったが、オーデイションに落ちて叶わず。当時は、非常に残念に思ったものだ。

この曲がクラシックの編曲であり、しかもカットや転調されていた事を知ったのは、確か六月頃。一人の部員に、だったん人の踊りのCDを貸してもらって聴いた時だった。

先輩達の演奏とCDの演奏、雰囲気がまるで違ったのである。そう、吹奏楽とオーケストラの演奏なのだから、違うのは当たり前だ。最初は、CDの演奏に違和感を持った。先輩達の演奏を先に聴いていたので、吹奏楽版の方がしっくり来ていた。だが、何度もCDを聴いているうちに、オーケストラ版の方も好きになっていった。

こうして私はクラシック、そしてオーケストラを知り、意識し始めたのである。

後に、吹奏楽ではクラシックの編曲も多く演奏されている事を知った。クラシック編曲ではコントラバスも目立つと聞いて、私はクラシック編曲をぜひ演奏したいと、度々思った。

その後、私の在部中に、クラシック編曲を二曲程演奏した。コントラバス担当の私にとっては、喜ばしい事である。……しかし、私は何故か、演奏してもしっくり来なくなってしまった。

クラシックの編曲では、コントラバスが中心になれると思っていた。しかし、それは違ったのである。少なくとも、私が弾いた二曲はむしろ、チューバの方が低音の主役であった。だって、吹奏楽オリジナルでもそうなのに、コントラバスの楽譜はクラシック編曲でも、チューバと同じ所ばかりだったのである。

どんなに頑張っても、コントラバスはさほど音量が出ない。音量が出るチューバの方が主軸になるのは当然の事だった。吹奏楽という形態では、コントラバスはあくまでサポートなのである。

私は、自分の隣にいるチューバを羨ましく思い、同時に、吹奏楽でのコントラバスの扱いに疑問を持っていったのである。オーケストラの方に興味を持ち始めたのは、ちょうどその頃であった。

次回……初めてのオケ体験へ続く。

高校編 2 〱 オーケストラを体験して

吹奏楽部に入ってから本格的にクラシックを知り、好きになっていった私。オーケストラに興味を持つのも、時間の問題であった。気が早いけど、大学に入ったらオーケストラに挑戦するか、それとも吹奏楽を続けるか迷っていた。前回は何だかんだ言っていたが、私は吹奏楽だって好きなのである。ポップスではエレキベースでびんびん出来るし。

クラシックを演奏するのなら、オーケストラで弾きたい。でも、オケではコントラバスがいっぱいいるから、合わせるのが大変そうだし、窮屈ではないか。それなら、吹奏楽部でコントラバス一人で、自由気ままに弾いたり、ベースを楽しんだりした方がいいのか。

そんな迷いを密かに抱えたまま吹奏楽部を引退。そして六月。再び転機が訪れる。

「琴子。今度何とか交響楽団の定期演奏会でワークショップやるんだけど、出ない？」

ある日突然、元吹奏楽部メンバーの友達に誘われたのである。私は非常に驚いた。

実は数日前、何とか交響楽団の定期演奏会のチラシを見ていた。チラシには、ワークショップとして、定期演奏会に出演してくれる高校生までの子供を募集していたのだ。出たいと思ったが、チラシを見た日は定期演奏会の二週間前だったので、「もう間に合わないだろうなあ」と諦めていたのである。

だが、思ったよりも参加する人が少なかったため、今でも募集していたそうだ。私は即OKを出した。めったにない機会だ。それに私はコントラバス弾きで、クラシック好き。オケで弾かせてくれるこの機会を断る理由は無かった。

そして、短い期間で曲をさらう。思ったよりも譜面が難しくて驚

いたが、同時にやりがいも感じた。こんなにやりがいを感じたのは、ルパン三世のテーマでベースを弾いた時以来だった。

団員の方達も優しくしてくれた。今までは一人〜三人で細々弾いてきたので、七人もいるというのは最初戸惑ったが、次第に慣れてきた。同じ楽器のメンバーが多くいるというのがどんなに楽しく心強い事か、引退してから分かったのである。

本番は、譜面が難しい&練習時間が少なかったたので、満足に弾けたものではなかった。しかし、楽しかった。

弦楽器がコントラバスの前にいる驚き、そしてコントラバスが低音の主役(だと、私は思っている)という快感と責任感。音程、ボーイングに気を使うという事。このワークシヨップから、私は多くの事を学んだ。

オケを体験した時点で、私の気持ちはオケに傾きかけていたが、この曲を聞いて、私は完全に「大学行ったらオケに入るう」と思った。

チャイコフスキー作曲 交響曲第六番「悲愴」。私が初めて聴いた交響曲である。何とか交響楽団の定期演奏会のメイン曲だった。

交響曲は長い。40分以上はかかる。私は、40分ずつと聴くのは耐えられるのか、そんな集中力があるのかと、最初は不安に思っていた。だが、その心配は杞憂に終わる。

「悲愴」は第一楽章から、いきなりコントラバスで始まったのである。その後、憂いを含んだファゴットのソロ。私はすぐに、「悲愴」にはまり込んでいった。

終始暗い雰囲気が残るこの交響曲は、あつという間に進んでいくように感じられた。そして、第四楽章の最後もコントラバスだった。心臓の音を表すというコントラバスのピッチカートは、少しずつ、静かに消えていく。そうして、命が絶え、悲愴は終わった。本当に静かな最後だった。これを聞いて、私は「交響曲って、こんなに素晴らしいものなのか」と感動した。

まず、コントラバスで始まり、コントラバスで終わる曲なんて、
そうそうあるものじゃないし、今まで聴いた事など無かった。少な
くとも、吹奏楽曲では皆無に近いのではないか。

しかも、この曲は最後までどことなく暗い。こういう曲は、私の
ストライクゾーンどんぴしゃなのである。

こうして私は、この珍しい交響曲の虜になったのであった。初め
て聴き、初めて好きになった交響曲が死を感じさせる曲だとは、一
体どういう暗示なのか分からないが。まあ、私はよっぽど、コント
ラバスという楽器に縁があるのだろう。うん、きっとそうに違いな
い。そういう暗示だという事にしておこう。

ワークシヨップでオケ体験をし、更に「悲愴」を聴いて、オーケ
ストラに対する意識が変わった。そして、私はこう思うようになって
た。

「社会人になったら、コントラバスを弾けなくなるかもしれない。
弾く余裕が出来ても、オケや吹奏楽団が中々見つからないかもしれ
ない。高校では吹奏楽を体験した。なら今度は、オーケストラをと
ことん体験してみよう」

そんな訳で、私は大学では、オーケストラに入る事に決定したの
であった。

……入った後の部活で悩むより、まず勉強しろよ……と思った方。
その通りである。実際、これから後、私は受験勉強に苦しむ事にな
るのであるから。

次回、高校〜大学編に続く。

大学編く縁があつて、ここに来た

六月にオーケストラ体験をしてから、「大学ではオケに行く！」と決意を固めた。そんな著者に待っていたのは、受験勉強地獄なのであつた……あらずじ終わり。自分史最終話では、今所属している大学オーケストラについて語ろうと思う。

私が通っている大学との出会いは、夏休みのオープンキャンパスであつた。ここでは音楽系の部活の発表会があつたので、興味本意に行つたのである。

発表していた部は、合唱部、マンドリンクラブ、そしてオーケストラ。オケに興味があつた私には、ちょうど良かった。

ただし、このオーケストラの演奏は、あまり記憶にない。どつちかというと、演奏会後に偶然出会つた、ヴィオラの素敵な先輩との会談タイムの方が、鮮明に思い出せる。

詳しい内容は伏せるが、この先輩との話を聞いて、何となく思つた事がある。

「私、来年はこのオケにいるかもしれないなあ」

本当にぼんやりした、不鮮明な思いだつた。しかし、私があのおケで弾いている姿は、容易に想像出来た。

時は進んで十月末。推薦試験を間近に控えた私は、受験勉強の癒しにと思つて、第一志望大学の学園祭に来ていた（もちろん、夏休みに来た大学と同じ大学である）。

大学に着いて真つ先に行つたのは、オーケストラが運営している音楽喫茶である。この喫茶では、団員の演奏を聴きながらケーキを食べる事が出来るという、素晴らしい仕様であつた。

ケーキを食べながら、先輩達の演奏を聴く。ケーキも美味しかつたし、何よりも、演奏に驚いた。

演奏は、私が思っていたよりもずっと上手かったのである。この大学オケに入部するのは、初心者がほとんど（特に弦楽器の人）だと聞いていたが、初心者だとは感じさせないほど、素晴らしい演奏であった。楽器が違うから比べようが無いが、正直、私よりも確実に上手だった。

私は、色々な意味でショックを受けた。そして、改めて決意したのである。この大学に入れたら、絶対にオーケストラに入ろうと。

結局、前期試験でその大学に受かり、入学式や新入生コンサートで先輩達の演奏を目の当たりにし、「皆カッコいい」という感想を抱きながら、私は晴れてオーケストラの一員になったのである。夏休みに感じた通りになったので、「これは運命だったのか」と思ったものだ。少なくとも、私はこの大学、このオーケストラとは、何か縁があったのだろう。だから、私は今ここでコントラバスを弾いている。

オーケストラに入団してからは、とにかく怒涛の毎日。あっという間に月日が過ぎていった。特に、十月に入ってから三ヶ月は、目も回るような忙しさ。大変だった。

でも、今年はマーラーの「巨人」やベートーヴェンの「第九」を始め、色々な名曲を弾かせてもらった。アマチュア、しかも楽器歴数年にしては、ずいぶん頑張ったと思う。難しかったが、弾いていて楽しかった。

二回生はもつと忙しくなるそうだが、一生懸命頑張りたいと思う。今度は、弾くだけで精一杯という状態では無く、多少は余裕を持っていきたいものだ。

来年は、チャイコフスキーの年になる。ロシア音楽、十分に堪能したい。

……と、ここまで書いた所で気付いたが、テキトーなエッセイとか言っというて、だんだん文章が真面目になってきた気がする。自分

の歴史を語るからか、テキストな感じにならなかった。来年は、もうちょい気の抜けた文章を書きたいものだ。

これを書いている今は、8時5分。年越しクラシックが始まってしまった。やばい。では、ここらへんで、自分史は終わるところ。ここまで読んでくださった皆さん、自分の自己満足に付き合ってくれて、本当にありがとうございます。

では皆さん、よいお年を。来年もよろしくお願いします。

祝典序曲 1812年（前書き）

自分の過去話を書いた後、書きたいネタはあるものの文章の方向性に行き詰まって更新放置していました。今回は実験的に、「文章が短くなってもいい。自分の思った事をテキストにつぶやいてみよう」というスタンスでやってみる事にします。

ちなみに、この話の制作時間は、15分です。クオリティは期待しないてください。

祝典序曲 1812年

この曲の一番有名な所は、タッタラタッタッタッタッタッタッタッタ（これで理解出来たらすごい）と、大砲を使う部分に違いない。

それに比べ、影が薄いとどこかで書かれていた第一主題、ヴィオラ、チェロのソリだって相当美しいのだ。そして、その後にあるチェロ、コントラバスとオーボエの掛け合いもいい。トロンボーン、チューバ等の低音楽器のメロディーは迫力満点。一方で、1812年にはロシア民謡の部分も入っていて、フルートが寒々とした雰囲気醸し出す。

1812年という曲は、聴けば聴くほど色々な色を見せてくれる、楽しい曲なのである。

だがこの曲、聴くと楽しいが、やるとなると別である。とにかく、めちやくちゃ難しい。とにかく、めちやくちゃ難しい。レッスンの先生が、「チャイ5（チャイコフスキー 交響曲第5番）より難しいかもね」と、爽やかに仰った。それくらい、コントラバスにはキツイ、速くて複雑なフレーズが多いのだ。特に、序盤がキツイ。

定期演奏会の一曲目にやるため、ただ今練習中の曲だが、指がかなり疲れる。その上、音が速すぎ& amp ;複雑で、とても追い付かない。こんな調子で大丈夫か？ ……大丈夫じゃない、問題だ。

とりあえず、今はゆっくり、そしてだんだん速く弾けるようになるうと、地道に行く事にした綾野であった。

……どうでもいいが、久しぶりに書いたものだから、文章上手くないなあ。そして、オチがない。そこは、どこかご勘弁を。

コントラバス

今更な事だが、私はコントラバスが好きだ。

マイナス面としては、立ち上がりは鈍く、遅れやすい。速いパッセージが苦手（第九の四楽章は、ヴァイオリンがやるのと同じような事をやっついていて、泣きそうになる）。弦を押さえていると指が痛くなる。

旋律を担当する事は少なく、伴奏が多い（でも、吹奏楽曲よりは明らかに旋律をやる機会が多いが）。いつも美味しい所をかつさっているチェロ、いつも主役のヴァイオリン、印象的なソロが多いオーボエ等が、たまに羨ましくなる。

だけど。私はそれでも、コントラバスが大好きだ。私にとっては、一番の楽器。

深く、心の奥底まで響くような低音。それが、私にとっては心地よい。弾いた時、腹に伝わる振動。目で見て分かる弦の振動。他の弦楽器よりも長く響き渡るピッチカート（指で弦を弾く奏法の事）。伴奏が多かったっていいではないか。コントラバスが音楽の土台となり、皆を支える。だから、皆のメロディーが一層際立つ。この感覚が、なんか良い。

これだから、喻えメロディーが無くとも、指が痛くなろうとも、コントラバスは止められない。

吹奏楽時代からコントラバスは好きだったけど、本当にコントラバスの魅力に気付いたのは、オーケストラに入ってからだった。

やはり、オーケストラの方が、コントラバスが必要とされているから。そしてオケ曲は、作曲者が、本当にコントラバスが必要な所に音を書いているって事が分かるから。

吹奏楽でコントラバスを弾いている皆さん、一度はオーケストラ

で弾いてみるのをお勧めします。オケで弾いた経験は、そのままオケに居座るにしても吹奏楽に戻るにしても、これからのコンバス人生で、絶対に役立つから。

とはいえ、吹奏楽のコントラバスを否定するつもりは全くない。ちゃんとした奏者が弾くコントラバスは、吹奏楽でも埋もれる事なく、際立つ。

ホールで聴けば分かる。弾いている本人は自分の音が聞こえなかったとしても、観客席では、コントラバスの音が響いているから。

(ちゃんとした奏者が弾く)コントラバスがいるバンドの低音は、深みがある。そういう意味では、吹奏楽のコントラバスもバカには出来ないし、むしろ重要な存在だと思う。

生憎、私はちゃんとした奏者とは言い難かったので(特に音程面は酷かった)、音が観客席まで届いていたのかといえ、微妙だ。もしまた、吹奏楽で弾く機会があったならば、リベンジしたいなあと思っっている。

……段々話が逸れてしまった感があるが、気のせいだ(と信じたい)。

大学を卒業してしまったら、下手したら、もうコントラバスを弾く機会が無くなる。

万が一、弾ける機会があったとしても、きっと、弾く時間が無い。頑張っただけ、週二だろうか。今は週五日程コントラバスを弾いている。貴重な時間だ。

上の文章を書いていて、私は、今、沢山弾けているこの時間を大切にしようと思えるようになった。

卒業まで後二年少し。残り少ない。残された期間を有意義に活用しよう。大好きなコントラバスを、思う存分弾こう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6320p/>

なんて楽しいオーケストラ！

2011年10月30日10時20分発行